

# Care as Worry : Pedagogy and Care Are Not Separable

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: MURAI, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3847">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3847</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 気がかりとしてのケア —教育とケアは分離可能か—

児童学部 児童学科 村井 尚子

**要旨：**教育学研究においては、ケアと正義を対比させる文脈でケアリング論の検討が行われてきている。本稿では、ケアという語を実践的な行為として捉えるケアリング論とは方向性を違え、まずはケアという語の語源を辿った。ケアは元々は気にかかる、気がかりという意味合いを強くもつもので、ハイデガーの存在論の中心的概念である *Sorge* を手がかりに考えることで、我々の生の有り様が照らし出されてくる。気がかりとしてのケアは、親であることの副作用ではなく、気にかけていること自体が親であるという生活そのものであると言える。言い換えれば、気がかりは親であることの原料であり、子どもの生へと自身の生を寄り添わせる接着剤の役割を果たす。子どもの側から見れば、ケアしてくれる＝気にかけてくれる存在が、子どもが育っていくためには不可欠なのである。この気がかりは、親であるかぎりずっと続く慢性の病とも言える。つねに気にかけて続けることは、痛みを伴うものでもあるが、子どもを希望として経験することもまた、親であること、ケアすることの原料だとも言えるのである。

**キーワード：**教育、気がかりとしてのケア、ケアリング、親であること、気遣い

### はじめに

ケアという語は、昨今世界的にも我が国においても様々な含意のもとに用いられており、ヘア・ケアといった日常語からケアの倫理を正義のそれとの対比において捉える一連の議論でも盛んに検討されている。とりわけベナー (Patricia E. Benner) やノディングズ (Nel Noddings, 1929-) が看護や教育の領域における「ケアリング」の重要性を強調し、注目を浴びるようになって以降、ケアという語は道徳的な面に焦点を当てた職業的なかわり方を表す「専門家の用語<sup>1)</sup>」となってきている。そして従来この語のもっていた「気がかり、心配」といった含意が次第に薄れ、ケアは概念的、認知的なモデルを示すものとなってきた。

本稿では、ケアと言う語の持つ「幸せな、そしてより受け入れやすい側面」だけでない要素をヴァン＝マナー (Max van Manen, 1942-) が 2000 年に *Curriculum Studies* 誌に発表した論文「道徳的な言語と教育的経験」及び未公開の原稿『教育的な感受性とタクト』を比較参照しながら現象学的に考察し、従来のケア＝世話の概念に加えてケア＝気がかりという概念を提起する。気がかりとしてのケアは我々の教育的な日常の経験に、剥がすことのできないものとして貼り付いている。この概念の検討によって、教育とケアとは別々の行為ではなく、ケアは親や教師として生き

ている我々の教育的な生の本質的な要素として不可避免的に含まれるものであるということが示される。さらに別稿において、このケアとしての教育と責任との関係が検討される。

ケアという概念を最初に検討したのはアメリカの発達心理学者キャロル・ギリガン (Carol Gilligan, 1937-) であると言われている。ギリガンは従来の男性中心的な視点の下に語られてきた正義の倫理に対して、ケアの倫理を主張した。それを受け、哲学者メイヤロフ (Milton Mayroff) が小著『ケアの本質』を著し、またネル・ノディングズが日本に大きな影響を与えた『ケアリング』と、教育のあり方自体をケアリングの思想によって転換することを訴える『学校におけるケアの挑戦』を出版した。我が国では池川が看護学の領域で、『看護—生きられる世界の実践知』においてケアという概念を用いたのが最初とされ、ベナーのケアにおける臨床知の概念も広く知られている。さらに川本が『現代倫理学の冒険』においてケアの倫理を倫理学の領域に導入した。

教育学におけるケアリング論の先行研究としては、早いものではノディングズのケアリング論を用いて実際の教育現場におけるケアリングの実態調査をしている中野の『教育的ケアリングの研究<sup>2)</sup>』が被引用回数も多い。が、この文献は実証的な研究志向にもとづく

ものであり、教育学におけるケアの意義についての原理的考察までは行われていない。哲学的な観点からケアリング論を扱っている研究としては、ケアを正義との対比で論じ、その統合の可能性を探った立山の「正義とケア<sup>3)</sup>」、ノディングズのケアリング論を理論的基盤に据えた道德教育を提唱する林の『ケアする心を育む道德教育—伝統的な倫理学を超えて<sup>4)</sup>』、学校教育、道德教育、保育といったそれぞれの領域におけるケアリングの実際やそれぞれの論者におけるケアリング論について詳細な検討を行った中野・伊藤・立山の『ケアリングの現在—倫理・教育・看護・福祉の領域を超えて—<sup>5)</sup>』が注目されるべきであろう。本稿ではしかし、これらのケアリング論についての研究とは方向性を違え、教育の営みの中でケアがどのように経験されているかを現象学的に検討する。

本稿では、ランゲフェルト (Martinus Jan Langeveld, 1905-1989) 教育学の影響下にあるカナダの現象学的教育学者マックス・ヴァン＝マーネンの「教育」の概念を援用し、「大人が子どもの未来に向けて善いとされる行為を行うこと」として広い意味で定義されるヴァン＝マーネン独自の教育 (学) (pedagogy) を採用する。そのうえで、care という語の原義を検討するところからはじめ、care と近い内包をもつドイツ語である Sorge についてハイデガーの概念規定を用いて考察を行なう。そして、care を気がかりとして捉え直す試みを行なっていく。

## 1. ケア＝世話とケア＝気がかり

### 1) ケアということばの氾濫

care は我が国では現在翻訳されずにそのまま「ケア」という語が用いられている。その理由を川本は、柳父の「翻訳後のカセット効果<sup>6)</sup>」という用語を用いて説明している。すなわち、「中身は不明でも素敵な何かが入っているはずだ、と信じ込ませてしまう」この効果によって、「ケア」という翻訳語についてきちんと議論すべきことがらが覆い隠されてしまう危険性を孕んでいると考えられるのである。川本によれば、「ケア」は医療・看護の領域において最もよく使われ、「急性疾患のケア (治療) から慢性疾患のケア (介護)」へと医療の重心移動を背景として「プライマリ・ケア」、「ターミナル・ケア」、「ホスピス・ケア」という一連の「ヘルス・ケア」が言われる。また、社会福祉の分野でも、「ケアワーク」「ケアワーカー」という術語が 70 年代半ば頃から専門雑誌に登場し、さらに「ヘア・ケア」等といった言葉まで登場してきている<sup>7)</sup>。今日で

あればさらに、「メンタル・ケア」や「ボディ・ケア」といった派生的な言葉も一般的になっていると言えるだろう。こういった状況を川本は、すでに 1995 年の時点で「ケアということばの氾濫」と名づけ、「十分な理解もないまま、種々のケアを『ケアする』(気にかける) よう煽られているだけではないか」と問題提起する。そして川本は、ケアを「介護」「世話」「配慮」の 3 つに分節化した上で、看護学、心理学、系譜学の分野で別々に積み重ねられてきたケアに関する考察を突き合わせる試みを行っている<sup>8)</sup>。

教育学においても上述のように、ケアリング論の文脈でケアと正義との対比としてその問題が取り上げられるようになってきているし、教育をエデュケア (エデュケーションとケアを合わせたもの) として定義し直そうとする試みもみられる<sup>9)</sup>。また後述するが、就学前の教育や保育を education と care の一体となったものとして捉える定義がなされるようになってきている。次節では、ケアリング論について簡単な素描を行なっていく。

## 2) ケアリング論の生成

ギリガンは、エリク・H・エリクソン (Erik Homburger Erikson, 1902-1994) のライフサイクル論とローレンス・コールバーグの道德性の発達理論について女性を対象として検証していく中で、男性とは違った「声」を感じたという<sup>10)</sup>。従来心理学ではこの声に十分な注意が払われてこなかったために、女性は道德性の発達の過程で低い段階に留まるとみなされてきたと考えたギリガンは、二つの思考様式を「正義の倫理」(ethic of justice)、「ケアの倫理」(ethic of care) と名づけた。以下に川本の定義に従ってこの 2 つの違いを簡単に俯瞰しておきたい。「正義の倫理」によれば、道德の問題は諸権利の競合から生じるものとされ、形式的・抽象的な思考でもって諸権利の優先順位を定めることで問題の解決が図られる。それに対して「ケアの倫理」は、<他者のニーズにどのように応答すべきか>という問いかけが何よりも重視され、諸責任の葛藤が道德上のジレンマの核心を構成する。そして「ケアの倫理」においては、ジレンマの解決のために「文脈＝状況を踏まえた物語的な思考様式」が要求されるのである<sup>11)</sup>。ギリガンによれば、男性のアイデンティティは条件一個人の業績や立派な構想、際立った仕事ぶりーに結びついているのに対し、女性はアイデンティティを親密性と心くばりという関係を通じてとらえる<sup>12)</sup>。つまり、正義の倫理は公平の倫理であり、ケア

の倫理は心くばりの倫理と言い換えられるのである。

品川は、ケアの倫理によって近代の倫理理論のなかではあまり語られることのなかった異質な価値が提唱されたと意味づける。さらに、子どもを育てるという営為は看護等の実践と同様にケアリングの要素が大きいことも指摘している<sup>13)</sup>。

このギリガンの提起を受けて、メイヤロフ、ベナーといった人たちがケアリング論を展開してきたが、現在最も大きな影響を及ぼしているのはネル・ノディングズであろう。ノディングズは主著『ケアリング』において、ケアリングを「専心没頭(engrossment)」と「動機の転移(motivational displacement)」という二つの概念を用いて意味づけている<sup>14)</sup>。「専心没頭」とはノディングズによれば、自分自身の中に他のひとを受け容れ、そしてそのひとと共に見たり感じたりすることである<sup>15)</sup>。さらに他のひとの実相を自分にとってのひとの可能性とみなすときに「動機の転移」が起こる。すなわち我々は、「耐えがたい苦しみを取り除いたり、痛みを和らげたり、必要を満たしたり、夢を叶えたりするために、行いを」しなければならなくなるのだ。この「行い」をノディングズは「ケアすること」と名づける<sup>16)</sup>。

このようにケアリング論が生成するにつれ、ケアという語は元来の意味を離れ、道徳的な含みをもった「行い」、すなわちその実践的な倫理的行為の意味合いが強調されるようになってきた。しかしそもそも、careという語はどのような内包をもち、どのように用いられてきたのであろうか。

### 3) care の語源

care という語は、オックスフォード辞書によると、「1.mental suffering, sorrow, grief, trouble 2.burdened state of mind arising from fear, doubt, or concern about anything ; solicitude, anxiety, mental perturbation ; 3. serious or grave mental attention; the charging of the mind with anything ; concern ; heed ; heedfulness, attention, regard; caution, pains 4.charge; oversight with a view to protection, preservation, or guidance 5. an object or matter of care, concern, or solicitude<sup>17)</sup>」などの意味がある。日本語においては英語の care という語は名詞としては「心配、心配事、煩勞、心勞、気苦勞、気がかり、悩みの種」、動詞では「1 心配する、気にかける、関心をもつ、かまう、世話する、面倒をみる、看護する 2 愛する、好む、欲する<sup>18)</sup>」などと翻訳される。

『哲学・思想翻訳語事典』によれば、care は語源的には「悩み、悲しみ、嘆き」といった意味をもっていたが、16世紀頃イギリスで成立した救貧法において労働不能な浮浪者を救うという考え方が出てきたことから、世話をするといった看護・介護的な意味合いが現われてきた<sup>19)</sup>。

このように元々は「心配」「気がかり」といった意味合いが強い care という語であるが、我が国においても諸外国においても「ケア」「ケアリング」という語が術語として用いられるようになるにつれ、「心配」「気にかかっている」という本来の語義から実践的な行為へと指示内容が異なってきているとも考えられる。上の川本の3つの分類においても、「配慮」とはミシェル・フーコーが着目した「暮らしの技法としての養生生活<sup>20)</sup>」を「自己へのケア」として読み解いたものであった<sup>21)</sup>。

ヴァン＝マーネンは、ケアすること<sup>22)</sup>がいかにアクチュアルに（私のものとして現実的に）経験されているかを理解するために、「倫理的な経験への注意深さを保っている、より文学的で想像的な素材を支持し、概念的、認知的なモデルは除外する」。そして日記や逸話、インタビュー、インターネット上のやりとりといった様々な日常の素材を検討し、このケアという道徳的な語彙が親や教師としての子どもへの責任において経験されているその繊細な意味を取り出す試みを行なう(ML316-317)。

この経験を基礎とした倫理から取り出されるのは、「気がかりとしてのケア care as worry」である。「多くの親にとって、ケアとはやきもきしたり、気をもんだり、気にかかったりすることを含んでいるようだ(ML317)」。この提起を受け我々は、ケアを能動的な行為としての「ケア＝世話」と「気にかかっている」という実存的なあり方としての「ケア＝気がかり」とにいったん分割し、これまであまり取り上げられてこなかった後者の側面に現象学的な仕方では立ち戻ることを目指す。そしてこの枠組みを通して我々の教育的な日常を眺め、教育とケア＝気がかりとの関係について考察を加えることにしたい。

## 2. 気がかりとしてのケア—親であること

### 1) ケア＝気がかり

ヴァン＝マーネンは、ケアの実践面を強調して世話としてのケアリングという用語を用いるノディングズとは立場を異にし、ケアを気がかり(worrying: オランダ語では zorge、ドイツ語では Sorge という意味合

い<sup>23)</sup>)という人間の世界に対する態度の有り様から捉えようとしている。worry は、オックスフォード英英辞典によると「実際の、あるいは潜在的な問題に関して心配(気がかり)や悩みを感じる、あるいは感じる原因となる」とされる。現象学的な看護論を展開しているベナー／ルーベル(Judith Wrubel)は、caring を看護において第一義的であると提起するのであるが、彼女らがこの語において意味するのは「人が何かにつながる」とめられていること、「何かを大事に思うこと」であり、様々な意味での「巻き込まれ関与していること involvement」がこの言葉によって表現されるという構想をもつ<sup>24)</sup>。訳者である難波によって caring は「気遣い」と訳されているが、我々は彼らと方向性を共にしつつも、能動的な意味合いが強い「気遣い」ではなく、しかも下に述べる Sorge の訳としての「気遣い」との混同を避けるために、さらに worrying の状態に投げ出されてあるという契機を重視して「気がかり」という語を用いることにする。

ケアを気がかりとして捉えるこの構想を、ヴァン＝マーネンがハイデガーの強い影響を受けていることから読み解いてみたい。ハイデガー(Martin Heidegger, 1889-1976)の主著『存在と時間』によれば、「現存在 Dasein の存在は気遣い(Sorge<sup>25)</sup>)として露呈する(強調は原著者)(SZ 訳 318)<sup>26)</sup>。『アリストテレスの現象学的解釈 現象学研究入門』においてはもう少し平易なかたちで論考が進められる。「動詞の意味に解するならば、生はその関連意味に従って、気遣うこととして解釈できる。或るものために、また或るものことを気遣う、気遣いつつ或るものに依存して生きる、というように<sup>27)</sup>」。北川は Sorge を「気遣い」と訳し、我々は「気を遣う」という態度によって「世界を引き寄せ、なにかを気かけながら生きているのだと解釈する<sup>28)</sup>。つまり、気がかりとしてのケアの側面に光を当てることはハイデガーの現象学にとって重要な位置を占める Sorge という概念のもつ現存在の実存的なあり方を受け継ぐことにつながると考えられるのである。ただし、ハイデガーは「気遣い」をあらゆる現存在において存在的に眼前に見いだされるような、「辛苦」、「憂愁」、「生活の心配」などと理解されることを防ごうとしている(SZ 訳 141)。この点に留意しつつ、「気遣い」のあり方をこれから care について考察を行なって行く際の手がかりとしていきたい<sup>29)</sup>。

ところで渡邊は、「現存在の根底に」「不安の気分が潜んでいる」ことを見て取っている。現存在の本来的なあり方からの逃避を背後から脅かし、「より根源的な

本来的自己への呼び醒し」をなすのが現存在の本質的な気分としての「不安」であるとされる<sup>30)</sup>。

## 2) 子どもの不安

そこで、次に不安について検討を行うことにしよう。関心としての現存在は、ハイデガーによれば「不安 Angst」によって際立って存在的に開示される(SZ 訳 320 以降)。現存在は、世間と配慮される「世界」とに融けこむことで、本来的な自己としての自己自身の可能態から逃亡している。しかし不安を覚えることによって、世界が世界として開示される。

「脅かしをおよぼすものがどこにもないということが、不安の対象を性格づける。不安は、おのれがそれに対して不安がるのが何であるのかを『知らない』のである(SZ 訳 323-324)」。つまり、何に対して不安を覚えているかがわからない、それが不安の本質なのである。しかし、「どこにもない」ことが「なにもない」ことを表している訳ではない。脅威をおよぼすものは、或る特定の方向のほうから近さの内部で近づいてくるのではなく、それはすでに「現にそこに」ある、それなのに「どこにもない」。そしてそれは「胸苦しくさせて、ひとの息をふさぐほど近くにある」にもかかわらず「どこにもない」のである。ここで重苦しく迫ってくるものは、客体的な存在者、あるいはそれら存在者を合計したものではなく、「世界そのもの」なのである。不安においてひとは「不気味」なのである。そして不気味さは、「居心地のわるさ」をも指さしている(SZ 訳 323-326、強調は原著者)。

不安は死に向かう存在としての我々の実存に関連づけられる。子どもは、自分の死や家族の死についての不安に苛まれる経験をすることがある。筆者も、小学校低学年の頃に自分の両親が死んでしまったらどうしようかと気がかりで1週間ほど眠れなかった記憶がある。考えに考えた結論は、「自分が両親より先に死ねば両親の死を経験しなくて済むから大丈夫だ」といういかにも子どもらしいものではあったが、多かれ少なかれ似たような経験をもつ人は多いのではないかと考えられる<sup>31)</sup>。

ヴァン＝マーネンはアメリカの作家であり詩人であるジュディス・ミンティ(Judith Minty)の日記から、彼女の息子が抱える不安と、息子を気にかけている母の心情が書かれている箇所を引用する<sup>32)</sup>。子どもが不安を抱えるというこの種の出来事は、日常生活において多くの親が遭遇するものであるが、それがミンティによって見事に精緻な仕方で描き出されている。ヴァ

ン＝マーネンはそこにどのような気がかりとしてのケアが存在しており、その気がかりとしてのケア自体が彼女の親としての教育的な行為にいかにつながっているかを分析している。

### 3) 息子の不安と母のケア＝気がかり

ミンティの3人の子どものうち、13歳の長男はその日腹痛を訴え、半泣きになって8時過ぎにフットボールの練習から帰宅し、夕食をほとんど食べず、シャワーを浴びて部屋に入って行った。「私には彼が泣いているのが聞こえる。が、それほど気にはかかっていない。ちょっとした風邪でも大騒ぎする子なのだから。少しだけ盲腸かもしれないという思いが頭をよぎったが、その考えを払いのけた。前にも彼が自分を苦しめるものとうまく折り合いをつけることができずに泣いていたことを思い出した。しばらく待つことにしよう、何が起きるかを見てみよう」(ML 317-318)。

息子の具合の悪さの原因がフットボールの練習によるものなのかを彼女は尋ねたが、そうではなかった。他の姉妹達と話をしながらミンティは「閉じられたドアの向こうで、離れたところで息子がまだ泣いている」のを耳にしている。彼女がベッドで本を読んでいるときに息子がやってきて足下に座ると、「長男の危機だ」と悟った他の家族は部屋から出て行った。彼は姉が数年後にカレッジに入って家から出て行くことが気がかかっていると語り、泣きじゃくり始めた。「ぼくは何も変わって欲しくないんだ」と。そして気がかりと悲しみと涙が堰を切ったように溢れ出した(ML318-319)。

息子の不安は、変化への不安、さらにいえば死への不安であった。13歳のこの少年にとって、未来は希望としても経験されようが、現在の幸福な状態が恒常的には続かないということを指し示すことにおいて不安として襲いかかって来る。

### 4) 接着剤としてのケア＝気がかり

ミンティが日記の中で「それほど気にはかかっていない」と述べている部分にヴァン＝マーネンはこの母親の思慮深さを観ている。それは自制のための言葉であり、もちろん気になってはいるのである。つまり、彼女自身の感情や欲求によって息子の感情や欲求をさらに翳らせてしまうことがあってはならないと確信するために、「それほど気にはかかっていない」と自らに言い聞かせているのである。この一言によって彼女は、子どもに寄り添うあり方としての気がかりの有り様と、自分自身の気がかりの方に居座ってしまう有り様との

うちの、前者を選択している(ML318)。それゆえこの気がかりは、「わがままだとか無益だとかみなすような種類のそれ」とは異なる。それは「親であることの通常の原料」、すなわち親であればそうしているしそのように考える、そういうものなのだ。

さらに言えば、泣いている息子に向けてのこの種の気がかりは親であることの「副作用」ではなく、「これこそが親であることという生活そのもの」と言える。「毎日の生活の状況の中で、ケアすることは気にかかりながら注意深くあること attentiveness として生きられている (ibid.)」。

気にかかっていることが親であるというあり方の「原料」とは、有り体な言い方をすれば「親であるかぎりは(子どものことが)気にかかっている」と言い換えることが出来るかもしれない。さらにヴァン＝マーネンは「気にかかっていることは、父親や母親を子どもの生にくっつけておく心の接着剤 spiritual glue である」というメタファーを用いる。気がかりは親の義務 duty や責務 obligation というよりは、ケアしている人(多くは子どもであろう)と私達とを寄り添わせて keep in touch おくものなのである。親は子どものことをずっと気にかけて、心配し続けて＝考え続けている。親になったかぎり子どものことが頭から離れることはない。ヴァン＝マーネンはこれこそが親であることをかたちづくる「原料」として定義する。

### 5) 教育的タクト豊かな行為へとつながるケア＝気がかり

変化を望まない彼は、9歳のときにはベトナムでの戦争について気にかかっており、10歳のときには太陽が燃え尽きたらどうなるだろうと悩んでいた。「このタフな少年—子どもについて、私達は彼の成績が D+ や C- であることについて悩んでいたが、彼にとっては私達他者は違った深さをもっているのだ」。姉がカレッジに入って家から出て行くことが気にかかっている彼にとって、親が死ぬことは想像もし難い恐怖であろう。「彼が103歳になってもし家族が誰もいなくなってしまうたら、彼はどうなってしまうだろう」。そう考えたミンティは、息子が103歳になったときには、妹のアニーは101歳で姉のローリーは105歳だと息子に告げ、そのことによって二人の間の緊張がほぐれ、笑い合った。そして母子は変化について話し合った。母は息子に「大人になったときに(息子自身が)何をしようかと計画を立てること、彼がいなくなることを私がどれだけ寂しいと思うか、そしてそれでも孤独に

はならないだろう」ということを伝えた。息子が将来今の家族のもとを離れて、新しい家族をもつだろうということも話し合った (ML319)。

ここで息子が抱えている気がかりは、「変化への不安」と言えるだろう。将来自分がどのように変化するか、親や姉妹との関係はどうなってしまうのか、そういった不安をこの13歳の少年は母に伝えることによってある程度打ち消すことが出来た。この種の不安は子どものみならず人間存在の誰もが抱えているものであるが、ここでは母親の息子に寄り添うタイプの気がかりと、「(あなたが)103歳になったときには、妹のアニーは101歳で姉のローリーは105歳だ」というタクト豊かな一言によって、少年の不安は軽減され (ハイデガーの言うように、不安が消失することはあり得ない<sup>33)</sup>) た。

母親はやはり自身が不安を抱えながらも、子どものために自分の気がかりを押し止めておくように振舞っている。すなわち、子ども達が成長して家を出て行くのを寂しいと思う思いは、姉が出て行くことが気にかかっている少年よりもずっと親にとって強いということ伝え、それでもそのことを子どもが気にかける必要はない、と告げているのである。母親自身が息子について気がかりであるにもかかわらず、息子の気がかり=不安をぬぐい去るように努めているこのあり方を、ヴァン=マーネンは母による「教育的な傾聴 pedagogical listening」と呼んでいる (PST5)。

ここで「教育的」とされているのはどのような含意をもってであろうか。ミンティが子どもの依存に任せるのではなく、この13歳の子どもにとっていずれは独立することが求められていること、両親や姉妹もいつまでも生きてはいないことを明確に子どもに理解させた上で、それをユーモラスな仕方で子どもに統合させていることにある。大人に求められるケア (ケア=気がかりとケア=世話とが統合されたケア) とは、ヴァン=マーネンによれば「大人が子どもの代わりをするのではなく、子どもがそこで力強くあるような、またそれによって力強くなるような場所を彼 (女) が用意してやるという仕方で」そうすることである。親や教師は、「子どもの依存的で未成熟な状態が明らかに必要としていると考えられる範囲を超えて・・・過度に子どもの『不安』を和らげる」ことはしない。そうではなく、「子どもの自己理解、自己責任、物質的に十分な資力、精神の自由を発展させること」を援助することが求められる<sup>34)</sup>。ケアはそれゆえ、タクト豊かに子どものおかれている状況を見極めることによって成立するので

ある。

### 3. 慢性の病としてのケア=気がかり

#### 1) ケア=気がかりの不在

ところでこのケア=気がかりとしての「教育的な傾聴」をその生において享受できない子どもは、どのような経験をしているだろうか。

「路上で生活していて一番恐ろしい事は、自分に対して夢を持ってくれる人が一人もいないということだよ。普通の子なら、親がその子のことを気にかけてくれる。誰一人として、父さんも母さんも僕の事を気にかけてくれた事はないんだ。僕のために夢を見てくれた事もないんだ」。

ヴァン=マーネンが CBC ラジオで耳にしたバンクーバーのストリートチルドレンへのインタビューの一節である (ML317)。自分のことを気にかけてくれる人が一人も存在しないということがどれほど恐ろしいことか、この子どもは身を以て体験している。気にかけてくれる人がいないということは、自分の世界における存在の価値を認めてくれる人が存在しないということの意味する。このストリートチルドレンのように、両親からケア=気がかりを受けることが出来ない子どもは誰か「親代わり<sup>35)</sup>」となって、ケア (=気がかり) してくれる存在を見つけることによって、その生の意味をようやく見出すことが可能になると言えよう。子どもがその存在を肯定する=新しい被包感を獲得する<sup>36)</sup> ためには、何らかのかたちでケアし=気にかけてくれる人がいることが前提となる。

#### 2) 慢性の病としてのケア=気がかり

ここでいったんミンティの立場に戻り、親の側に立って気がかり=ケアを考えてみよう。母親は子どもが寝入った後まだ起きていて、自分の言葉がけを振り返り、その是非を問うている。「私はちゃんとやれたのだろうか？ わからない (ML319)」と。ヴァン=マーネンはこの文章を受け、「子どもをもつと言うことは、ただ眠るだけと言うことがもう決して出来ないことと同様だ (ML319)」と述べる。気がかりという意味でのケアは、身の回りの世話をする、面倒をみるという意味でのケアが終わった後もずっと続く。「親のケア (ケア=気がかり: 註は引用者) は明らかにイライラしたと言うことはまれで、それよりもいつまでもそれを考え続けているということが多い」 (ML318)。

次に挙げるのは親元から独立して都会で10年以上

一人暮らしをしている女性の述懐である。

彼女のところに母親が訪ねてきて数日間滞在した。彼女が遅番を終えて遅い時間に帰宅したところ、まだ母親が起きていた。「どうして寝に行かないの？遅くなるって言ってあったでしょ」と尋ねる娘に対して母親は「・・・あなたがちゃんと家に帰ってきたか確かめたかったから」と答えた。・・・「(長い間一人暮らしを続けている娘のことを)手助けすることはできないけれど、ただ、あなたが大丈夫か知りたかっただけよ」と(ML317)。

この母親は、もうおそらく30歳を超えていて経済的にも精神的にも自立している娘の帰りを待って「やきもきした気持ち、気をもむこと、気がかり」を経験している。この母親のケアにおいては「世話」の部分は縮減し、「気がかり」の部分が比重を高めている。ケア=気がかりは、親が親であるかぎり(親となったその日から親でなくなる時まで)続く。ヴァン=マーネンによればこの親の気がかりとしてのケアは、子どもの側にはしばしば厄介で面倒なこととしても経験される(ibid)。ある意味では、親子間の葛藤の多くがこのケア=気がかりを巡って引き起こされているとも言えるほどであろう。しかしながら、上述の「接着剤」という語を思い起こせば、ケア=気がかりによって、親の心は子どもへのつなぎ止められ、寄り添い続けると言えるのである。

この接着剤としてのケア=気がかりは、平静化することがなく、永遠に満足することが得られない種類のものである。「不思議なことに、私が他者のことをケアすればするほど、さらに気がかりは強くなり、ケアしたいという欲望 desire はさらに強くなる(PST6)」。ここでの欲望は、欲求 want や必要 need とは別物だ。例えば高価な自転車を買いたいとずっと思っていて、とうとうその夢が叶えられると私は満足する。あるいは自分の欲求が思っていたほど重要なものではなかったと言うことに気づき、がっかりすることもある。満たされるにせよ、そうでないにせよ、欲求や必要は落ち着く(平静化する)のであるが、ケアの関係において生きられている欲望は、「満足したり、欲望に対して折れる」といったことを超えたところにある(PST6)。

ヴァン=マーネンはこの欲望のあり方をレヴィナスに倣って愛のそれに擬える。恋人達は自分のことを愛しているかと尋ね、相手からの「愛している」という返答を得るが、一度返答を得ると、さらに尋ねたくなる。永遠に満足する答えは得られない。「欲望がそれ自体を補給し、それを燃え立たせる」(PST6-7)<sup>37)</sup>。

この意味でケア=気がかりは慢性的な病とも言えるかもしれない。親になるということは、子どものことが気にかかり続けるという慢性の病に罹ることであると。「実際、この気にかかることとしてのケアの状態は本当になにか苦痛の種のようなものだ。・・・実存的に、他者の傷つきやすさが倫理的痛みとでも呼べるようなもの—私に訴えを投げかけてくる他者との出会いにおいて生じる気がかりの状態の兆候という倫理的痛み—として経験されることが多い(ML324)」。

### 3) 希望としてのケア=気がかり

そして、この気にかかることは「私をこの他者の現前につなげておく(PST325)」ものであるゆえ、上のメタファーを用いれば「他者と私をつなげておく心の接着剤」であるゆえ、不可欠である。そしてこの荷の重い責任、つねに喜びに満ちたものとは言えない気がかりとしてのケアは、レヴィナスの言葉を借りれば、「善さの経験」である<sup>38)</sup>。

しかしたとえそれが善であり、避け得ないことであったとしても、やはりケア=気にかかることには未来への恐れ(不安)の要素が強くなってしまふことは否めない。品川は、「自己犠牲が善と同視され、その結果、ケアする人は尽瘁してしまう」とケアの限界を指摘する(品川、186)。子どもをケアする親や教師が尽瘁してしまつては、かえって子どもへの責任が果たせないことにもなり得ないか<sup>39)</sup>。

ヴァン=マーネン自身はここでは言及していないが、気がかりとしてのケアと希望とは表裏一体のものとして経験されているのではないだろうか。上に出したストリートチルドレンの例で、その男の子は「夢を持ってくれる人がいないこと」、父さんや母が「僕のために夢を見てくれ」たことがないと言うことが「一番恐ろしい」と言っていた。子どもに希望をもつ、子どもを希望として経験するからこそ、気がかりという意味でのケアが生じるのではないか。ミンティも日記の終わりの部分を次のような希望の言葉で締めくくっている。

「彼は眠っている。みんな眠っている。彼の心もよく休まりますように”I hope his spirit sleeps well”(ML319)」と。

ヴァン=マーネンの希望論に関しては別のところで詳述することにするが、ここでいったん、気がかりとしてのケアにおける「希望」の契機を強調しておきたい<sup>40)</sup>。



## おわりに

これまで教育学のディシプリンは教授法やカリキュラム作成、政策的なアジェンダに限定されてきた。それは時代や地域性に大きく影響を受けざるを得ない不安定なディシプリンだと言えるだろう。これに対してヴァン＝マーネンは、「教育学のディシプリンは気がかりとしてのケアという実践的でかつ反省的な倫理に基づく」と定式化している。「教育学は、子どもは大人によってその育ちをケアされなければ『育た』ないという気づきから始まる (PST14)」。太古の昔から時空を超えて行なわれてきた子どもをケアするというこの営みには、子どものことを気にかける慢性の病としてのケアと同様に、世話することとしてのケアが含まれているのは言うまでもない。ケア概念を現象学的に検討するために、これまでこの二つの側面を分節化して論じてきたが、気がかり＝ケアと世話＝ケアとが不即不離の関係にあることを強調しておかねばならない。

「重要なのは、深い意味でのこの気がかりとしてのケアが、我々の研究論文や専門の実践において発生したり理論化されたり、要求されたりするさらに派生的な様々なケアを理解したり豊かなものにしたりする源泉となることである (ML326)」。その上で、気がかりとしてケアを捉えて考察することで、そこから派生する様々なケアを理解し、より豊かなものにすることが可能になるのである。

保育という語を「教育」と「ケア」との結合体であるとする考えは、例えばユネスコが万人のための教育実現の文脈で ECCE(Early Childhood Care and Education)を、さらに OECD が持続可能な経済開発に関わって ECEC(Early Childhood Education and Care)という概念を提唱し、その重要性の喚起に努めていることから伺える<sup>41)</sup>。さらに我が国では、2008年に『保育所保育指針』が制定された際に、保育所保育の特性を「環境を通して、養護及び教育を一体的に行なうこと」とする定義がなされた。ここで「養護」という語において指示されているものは、主に生命の保持と情緒の安定である<sup>42)</sup>が、その背景にケアという概念への想定があったことは想像に難くない。『保育所保育指針』においては、養護と教育は切り離せないものであるとされつつも、それぞれ別の事象を示すものと捉えられている。しかし、ここで見てきたように、ケアを気がかりと捉えた場合は、ケアは親を子どもへと貼り付けておく接着剤を果たす、つまり親であることと気がかりとは切り離せないと言える。また、世話という意味でのケア (例えば保育指針で規定されている

ような生命の保持と情緒の安定) を除外した教育的な行為も成立し得ないことは、ベスタロッチー以降の教育学において繰り返し主張されてきている。このように、教育とケアとは別々のものとしてあってあとから一体化されるべきものではなく、そもそも同一の「こと」を指しているのである。

ケアを実践的な行為の文脈から外し、我々の親や教師としての教育的な日常の経験からこの概念を照らし出すこの現象学的な試みにはどのような意味があるのだろうか。

「ケアすることの本質を思い起こし想起することは、単なる語源的な分析や語の使用法の解説には留まらない。むしろ、それは生のあり方の再構築といえる。というのは、生の言語をより深く生きようという意志は、我々が自分自身に言及するとき、我々が何ものであるか—例えば教師や親として—にさらに真摯になるということなのである (RLE59、訳 98)」とヴァン＝マーネンは語源を辿ることの意義を主張する。

その言葉が使われている生活世界に立ち戻り、その豊かな意味を救い上げることは、我々の生をより豊かにし、より深い仕方で生きることを可能にするのである。

本稿では、親であることによるケア＝気がかりについてのみに論じたが、もとより教師にとっても生徒である子どもの存在は気がかりとしてのケアとして経験されている。ハイデガーは、「或るものために、また或るものものを気遣う、気遣いつつ或るものに依存して生きる気遣いが我々の生」であると規定していた。この概念規定を親としての生、教師としての生に敷衍することが許されるのであれば、我々は、親や教師として子どもとともにある自らの生を気遣い、気遣いつつ依存しているとも言い得るだろう。しかし教師としての生において、我々は複数の子どもを相手にしている。一度に複数の人を気にかけることができないにもかかわらず、教師は生徒達を、大人としての我々は世界中の子ども達をケアする必要性を感じる。この事態をどのように受け止めればよいのか、別稿「応答としてのケアの可能性と不可能性—教育責任への試論」において、この問題を取り上げる。

## 注

- 1) Van Manen, Max, Moral language and pedagogical experience; *Journal of Curriculum Studies*, 2000, vol. 32, No. 2, p.315. (以降は ML と略しページ数のみ記載する。なお、全く同じ文章が『教育的な敏感さとタクト』(Pedagogical Sensitivity and Tact, unpublished、以降 PST と略記しページ数のみ示す)にも再掲されている場合には ML のページを示し、内容に異同がある場合のみ後者のページを示す)。
- 2) 中野啓明『教育的ケアリングの研究』樹村房、2002年。
- 3) 立山善康「正義とケア」、杉浦宏(編著)『アメリカ教育哲学の動向』晃洋書房、1995年、348-364ページ。
- 4) 林泰成編著『ケアする心を育む道徳教育—伝統的な倫理学を超えて』北大路書房、2000年。
- 5) 中野啓明、伊藤博美、立山善康『ケアリングの現在：倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて』晃洋書房、2006年。
- 6) 柳父章『翻訳とは何か—日本語と翻訳文化』法政大学出版局、1976年参照。  
柳父は、翻訳のために新しく造られたことばが不意に目の前に現われたものとしてカセットのようであるとし、このようなことばに特有の現象や機能や効果などをひっくるめて「カセット効果」と名づけている(同上書、25ページ)。
- 7) 川本隆史、196-197ページ。
- 8) 同書、197-198ページ。
- 9) 現在、エデュケアという造語はかなり浸透してきているようである。例えば大阪教育大学幼児教育研究室の研究室紀要は『エデュケア』と名づけられている。
- 10) キャロル・ギリガン著、岩男寿美子訳『もうひとつの声』川島書店、1986年、xi (Carol Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, 1993, p.1.)。
- 11) 川本隆史『現代倫理の冒険—社会理論のネットワークへ』創文社、1995年、68ページ。
- 12) キャロル・ギリガン、287-289ページ Gilligan, p.163.。
- 13) 品川哲彦『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版、2007年、140-160ページ。
- 14) ネル・ノディングズ著、立山善康・林泰成・清水重樹・宮崎宏志・新茂之訳『ケアリング—倫理と道徳の教育 女性の観点から』晃洋書房、1997年、25ページ (Nel Noddings, *Caring: a feminine approach to ethics and moral education*, second edition, 2003, p.16.)。なお、著書名は本文中では『ケアリング』と略記する。
- 15) ネル・ノディングズ著、佐藤学監訳『学校におけるケアの挑戦—もうひとつの教育をもとめて』ゆみ出版、2007年、44-46ページ Nel Noddings, *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education*, second editor, 2005, pp.16-17.。
- 16) ノディングズ、1997年、23ページ(Noddings, 2003, p.14.)。  
さらにノディングズはケアリングの関係について次のような例を示して説明している。見知らぬ人が道を尋ねたとき、私は「その人の要求に注意深く耳を傾け、その人が受けとめ、認識するように応答する」。これは短い時間のことではあっても「ケアに満ちた出会い」となり得、このとき私は「専心没頭」の状態にある。さらに、「ほんの少し前まで、私は自分がすべきことを考えていたが、今や、キャンパス内の行きたい場所への行き方を見つけるというその人の課題を気づかっていた」。これが「動機の転移」であるという。(ノディングズ、2007年、44ページ (Noddings, 2005,p16.))
- 17) *The Oxford English Dictionary second edition*
- 18) 研究社『リーダーズ英和辞典第2版、松田徳一郎』1999年。
- 19) 石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語論創社、2003年。
- 20) ミシェル・フーコー著、田村俣訳『性の歴史II 快楽の活用』新潮社、1987年、125-180ページ。
- 21) 川本、同書、206-211ページ。
- 22) caring をここでは、ノディングズらのケアリング論と一線を画しているヴァン＝マーネンの立場に則ってあえて「ケアすること」と訳した。
- 23) Cambridge-Eichborn German Dictionaryによると、Sorge は concern, grief, heartache, vexation, custody, care, tuition, charge, worry と英訳されている。それぞれ、関心、哀しみ、心痛、悩みの種、保護、care、教授、責務といった訳が充てられるだろう (Cambridge University Press, 1983)。
- 24) ベナー／ルーベル著、難波卓志訳『現象学的人間論と看護』医学書院、2011年、1ページ。

- 25) 気遣い、配慮、関心等と様々に訳されるがゾルゲとそのまま標記されることもある。細谷、渡邊は「関心」と訳しているが、門脇らは「気遣い」という訳を充てている。
- 26) マルティン・ハイデッガー著、原佑・渡辺二郎訳『存在と時間』中央公論社、1980年、318ページ。(なお、これ以降SZと略しページ数のみ記す)。ハイデッガーにおいては、現存在は何よりもまず世界の中に投げ出されている「被投」的存在者としてあるが、それだけでなく、己れが存在を「了解」し、「企投」する実存性をも併せもっている。しかし大抵の場合は「ひと」となって本来の自己存在を忘却し頽落してしまっているものである。このような三つの契機の総合が「関心(気遣い)」ということになる(渡辺二郎「ハイデッガーの存在の思索」『渡辺二郎著作集第2巻ハイデッガーII』所収、筑摩書房、2011年、633-636ページ参照)。
- 27) ハイデッガー著、門脇俊介・コンラート・バルドゥリアン訳『アリストテレスの現象学的解釈—現象学的研究入門 第2部門 講義(1919-44)』ハイデッガー全集第61巻、創文社、2009年、96ページ。
- 28) 北川東子『ハイデッガー 存在の謎について考える』NHK出版、2002年、76-80ページ。
- 29) ドレイファスは、ハイデッガーと対談した折に「英語の"care"という語は愛とか気を遣うといった含みを持つということ」を指摘した。それに対するハイデッガーの回答は「それはちょうどよい」というものであり、彼はSorgeという語によって「存在が私にかかわってくる」という「非常に一般的な事実を名指したかった」と述べた(ヒューバート・L・ドレイファス著、門脇俊介監訳『世界内存在—『存在と時間』における日常性の解釈学』産業図書株式会社、2000年、274ページ)。
- 30) 渡辺二郎『ハイデッガーの実存思想 第2版』勁草書房、1974年、499ページ。
- 31) 死への恐怖は多くの文学作品にも描かれてきた。作田は、島尾敏雄が幼年期に「人はどうしても死ななければならないことに気付」き、家族が寝静まった後に死への恐怖に苛まれ続けた、という述懐に言及する。そして島尾の作品に通底して見られる不安と受動性の根底に、彼の死への恐怖感の強さが逆説的に存在していることを見て取っている。(作田啓一『現実界の探偵—文学と犯罪』白水社、2012年、80-108ページ。作田によって引用されている島尾敏雄の原典は「死をおそれて—文学を志す人びとへ」『島尾敏雄全集 第14巻』晶文社、1962年、90-97ページ)。
- 32) なお、ミンティの日記は入手困難なため、やむを得ずMLから引用した。
- 33) このような不気味さは現存在を不断に追跡し、たとえ表立ってはいないにせよ、現存在が世人のうちへと日常的に喪失してしまっていることを脅かす。この脅かしは、現事実に、日常的な配慮的気遣いの完全な安全性や充足性と提携することがある。不安は最も無害な諸状況のうちできざすこともあるのである(SZ訳327)。
- 34) van Manen, Max, *Researching Lived Experience*, SUNY, 1991, p.58-59. (村井尚子訳『生きられた経験の探究—人間科学がひらく感受性豊かな教育の世界』ゆみる出版、2011年、98頁。以降、原著RLEと訳書のページ数を本文中に記す)。
- 35) in loco parentis RLE41, 『生きられた経験の探究』訳書73ページ参照。
- 36) O・F・ボルノウ著、森昭・岡田渥美訳『教育を支えるもの』黎明書房、2006年、59ページ。
- 37) この部分は、レヴィナスを用いてヴァン＝マーネンの責任論を読み解く別稿においてさらに検討することにする。熊野純彦『レヴィナス—移ろいゆくものへの視線』岩波書店、1999年、67-68ページ。斎藤慶典『レヴィナス—無起源からの思考』講談社、2005年、94-100ページ参照。
- 38) 「表出のうちでみずからを押しとおす存在は私の自由を制限するのではなく、増進させる。私のうちに善さを生み出すことで、私の自由を増進させるのである。責任の次元にあっては、存在のまぬがれることのできない重さによって、笑いのすべてが凍りつく。・・・避けがたいことがらが有しているのは、善さと言う厳格な真摯さなのである」。(エマニュエル・レヴィナス著、熊野紀彦訳『全体性と無限(下)』岩波文庫、2006年、44-45ページ)。「私が<善>を選び取るよりも先に、<善>のほうを私を選んだのである。みずからの意志にもとづいて善良である者は誰一人としていない」。(E・レヴィナス著、合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年、41ページ)。  
またレッツァーはレヴィナスの「善」を次のように読み解く。「それは善いことの経験である。善さの意味の経験である。善さの経験である。善さのみが善いのである」。(Florian Rötzer, *Conversations with French Philosophers*, Humanities Press New

Jersey, 1995, p.61.)

- 39) 同様の問題が、別稿のレヴィナスの責任論においても不可避免的に生じてくる。自他の非対称性に基づく彼の倫理から言えば、「選ばれた」私は、自己を犠牲にしてその他人に尽くさねばならないことになる。
- 40) 斎藤は、充足が与えられることのない、その人に向けてたえず心を配ること、配らないではいられないこととしての「欲望」のうちにも「享受」が渾然一体となった形で含まれていることを指摘する。例えば、愛児の世話を焼き、気を配ることの中で、私はその笑顔やかわいらしい仕草を享受している。世話をすることは大変でも、やっぱり「楽しく」、「心充たされる」ことはある（斎藤『レヴィナス—無起源からの思考』107-108 ページ）。
- 41) 日本比較教育学会編『比較教育学事典』東信堂、2012年、202-203 ページ。education と care のどちらを先にするのかは、それぞれの政治的思惑が働いているようであるが、ここでは詳述は避けたい。
- 42) 厚生労働省『保育所保育指針』2008年。

## 参考文献

- 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』せりか書房、2001年。
- ギュンター・フィガール著、伊藤徹訳『ハイデガー入門』世界思想社、2003年。
- 斎藤元紀『存在の解釈学—ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012年。
- 作田啓一『現実界の探偵—文学と犯罪』白水社、2012年。
- 作田啓一『生の欲動—神経症から倒錯へ』みすず書房、2003年。
- 仲原孝『ハイデガーの根本洞察—「時間と存在」の挫折と超克』昭和堂、2008年。
- フィリップ・P.ウィーナー編『西洋思想大事典2』平凡社、1990年。
- ベナー著、井上智子監訳『看護ケアの臨床知—行動しつつ考えること』医学書院、2005年。

(本稿は日本学術振興会学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)) 課題番号 24531036 の助成を受けている)

# Care as Worry: Pedagogy and Care Are Not Separable

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences  
Naoko MURAI

## Abstract

In philosophy of education, many researchers treat the concept of caring in the context of care and compare it with the concept of justice. In this article, I tried to trace the etymological source of the word of “care”. In the process, I found that one of the original meanings of this word was worrying. In thinking about care as worrying, we may consider Heidegger’s ontological idea of “Sorge”. Care as worry is not a side effect of parenting. It is the essence of parenting. Worrying keeps us in touch with the one for whom we care. And from the viewpoint of a child, it would be terrible to have no one to worry about him or her. Being a parent, thus, is not only to worry chronically about a child but also to see him or her child as a hope.

Keywords : pedagogy, care as worrying, caring, parenting, Sorge